

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Hiroshi Hashiyama

1982年、福岡県八女市に代々続く石灯笼職人の家に生まれる。プロを夢見て野球一筋の生活を送っていたが、大学卒業を機に父に入門。以来、伝統の継承を目指して研鑽を積んでいる。



## 八女石灯笼 (やめいしどうろう)

福岡県八女市長野地区で採れる、阿蘇の火山の凝灰岩からつくられる石灯笼で、江戸時代初期より盛んに生産されるようになった。自然木型灯笼の他に、一般的な雪見灯笼や春日灯笼などもつくられている。



# 八女石灯笼職人

橋山裕司氏

故郷の伝統を守るために、  
ひたすら石を削り続ける。

福岡県八女市。かつて城下町として栄えた地に、古くから伝わる工芸品が八女石灯笼だ。その材料は、阿蘇の火山灰が堆積してできた凝灰岩。柔らかくて加工しやすい上、寒暖の変化に強く、さらに苔が付きやすい性質が庭灯笼に適していたことから、凝灰岩の豊富なこの地で灯笼がつくられるようになった。

市内には以前、数多くの工房があったが、後継者不足などにより次々と廃業を余儀なくされた。橋山裕司さんは、故郷の伝統を守るために日々汗を流す若き職人だ。

今は亡き祖父は孫の申し出をとて喜んでという。そして現在、四代目である父の下で修業に励む。

ひとくちに八女石灯笼といってもさまざまな灯笼がつくられ、その中でも代表的なのが自然木型灯笼。柱と呼ばれる土台部分を大木の幹のように仕上げる、野趣に満ちた灯笼だ。自然木型と謳うだけあり、柱に決まった形や模様は無い。全てがつくり手の感覚に委ねられるだけに、制作は難しい。

作業は採石場から始まった。橋山さんはハンマーで石を叩き、音や感触を確かめながら良質な石を切り出す。そして、灯笼の頂を飾る宝珠をはじめ、笠、火袋、受け鉢、柱の五つの部分にムダ無く分けていく。限り有る材料を大切に使うことも、伝統を守る者に課せられた使命の一つだ。

頭に思い描いたイメージを基に、五つの部分それぞれの形を整え彫刻を施す。最も気を配るのは、灯笼の要となる柱。

斧を振るう手を止めては、形や模様を確かめることを繰り返して、納得のいく柱に仕上げた。それは大地に根付いた木を思わせるに十分な出来だった。

将来の夢は？

橋山「今は機械も使っていますが、いずれは父のように手だけでつくれるようになりたいですね。一彫り一彫り、手業で仕上げた石には機械では出せない風合いがあるんですよ」

代々受け継がれてきた道を選んだ若き職人は、それがいかに険しかろうとも石を刻み続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年10月取材。掲載内容は取材当時のものです。

**MOVIE MORE!!**  
石の奥深さを感じながら日々石に向き合う姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

**MOVIE**  
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

**Web版**  
パソコンやタブレットでご覧いただけます。

アットホーム明日への扉



**TV番組**  
ディスカバリーチャンネル(CS)冠番組  
「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00



**ビジョン**  
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

**NEW!!**  
最新号のご案内

No.055 / 燕鋤起銅器職人 樋山 朗子 氏